

2020 年度 ダンス部 メンバーインタビュー

部員数 21～40人

所属学群 体育専門学群, 社会・国際学群, 人間学群, 生命環境学群, 情報学群, 医学群

練習場所 中央体育館ダンス場

主な成績

第32回全日本高校大学ダンスフェスティバル文部科学賞、同大会特別賞

アーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマ2020富山県知事賞

アーティスティック・ムーブメント・イン・トヤマ2020特別賞

池田 美里(体育3年/主将)

清水 朱夏(体育2年)

— 私が目指す「ダンス」

池田

今までのダンスは、ひたすら技術を求めてやってきたが、筑波に入って、ダンスは「表現することの一部」、表現としてのダンスをに会いました。想像力、表現力のあるダンサーになりたいと思っています。

清水

ダンスは、観ていて「意味がわからない」と思われることもあります。私が踊っている姿を観て「共感してもらえるダンス」を目指しています。例えば、「感動した」と思われるような「共感してもらえるダンス」をしたいと思っています。



— 筑波大学をどう思っていた？

池田

ずっと高校生の頃からダンスを部活としてやっていて、「筑波大学ダンス部」はずっと憧れの存在でした。常に刺激になっていて、目指したくなる存在でした。

高校生の時には、正直、雲の上の存在だったが、最後の大会で「ここまで結果が出たら、勇気を出して受けてみよう」と思っていて、そこに達したので、自分の中でレジェンドと思っている人たちと踊りたいと思って、筑波大学への受験を決めました。憧れの先輩がいて、その人を追って筑波に来ました。

清水

私は、「神戸(全日本高校・大学ダンスフェスティバル)」で初めて筑波大学の作品を見た時に、独創的で、世界観が素晴らしいと思ったのが第一印象です。それも他の学校とは違う、“異色感”に惹かれました。入学してみると、人が独創的という点もありますが、作品に対して、どれだけ極められるか、全て努力があつての「独創さ」だったと気付きました。

— 今のチームで学んだこと、チームの好きなところ

池田

「ダンスそのものの概念」が変わったと感じています。高校のダンスと、筑波大学でのダンスはやはり違って、もっと表現することに対してこだわる。踊るということに対して、一つ一つの動作に、どんな意味があつて、どんな思いがあつて、どんなことを伝えたいかということが詰まってこそそのダンスなんだなと感じています。「ダンスへの想像力」をここでは学んでいます。

また、筑波大学ダンス部は、いろんなキャリア・バックグラウンドのダンサーがいます。主将としても、一人の部員としても、「お互いを尊重する」「個々を大事にした」部活づくりやダンスづくりを学べたかなと思います。



清水

高校までは、後輩に対して先輩が厳しく注意や指導することが、後輩を大切に思うことだと思っていました。筑波では、先輩が姿で語り、行動で示す。違う先輩としてのあり方を見つけました。

また、作品へのこだわりを学びました。表現の仕方、作品の極め方が、とてつもない。ありとあらゆる方法を使って作品を高めていく姿勢を学んでいます。ダンス部の好きなのは、いろんなダンスを知れるところですね。

— これからの目標(直近の目標、人生の目標)

池田

ダンスを通じて「当たり前」に気付くことを大切に感じています。普段は見えていないものに「気付けた瞬間」、誰にでもあるけど、誰にも気付かれていないことに、ダンスを通じて気付き、気付いてもらえるといいなと思っています。それは、ダンスだけでなく、将来、当たり前で気付いて、そこに価値を感じられるような仕事に就けたらいいなと思っています

清水

ダンスは「表現」。表現するためには、自分の「生き方」が大切だと思っています。これまでの経験がその「表現に」現れると思っています。だからこそ「心が綺麗」でありたいです。飾らなくてもいい、自然体が美しい女性に憧れます。

— 未来のチームメイトに一言

池田

筑波大に入って様々な人に出会えて、「学びのある場所」だと実感しています。学群を超えて、すごい仲間がたくさんいて、毎日刺激がある場所、成長できる場所だと思います。是非来て欲しいですし、未来と一緒にダンスができることを楽しみにしています！

清水

筑波大学に入学すると考える人は、「トップ」の人が多いと思います。それでも筑波には、もっとすごいメンバーが集まっていて、びっくりすることも多く、刺激も多く、学びになると思います。

辛いこともあると思いますが、「筑波大学」は、きっと自分にとってもターニングポイントになると思います。ぜひ、一緒に踊りましょう！

